

# 静私公なだより



秋だ～！

- 夏の研修報告
- 特集「子どもと大人の育ちを手伝う仕事(その3)」 香野 毅
- 特集「可能性を引き出すリーダーシップ(その4)」 松原 美里
- コミュニティ(保育の窓)
- もの思い(青葉幼稚園／さくら台幼稚園)
- 多様性を楽しくまなぶ、海外園とのオンライン国際交流 前出 貴則
- ナイスショット&編集後記



NO.199  
2023⑫  
Winter

# 夏の研修報告

今年の夏の研修は初のサテライト研修を取り入れ、また昨年同様、対面とリモートの両方を取り入れながら、先生たちがより参加しやすいようにと研修委員会の皆様にご尽力いただきました。それぞれの研修の参加者たちの感想なども含め研修報告をいたします。

## 第34回静岡県私立幼稚園教育研究大会

〈7月24日(月)、グランシップ〉

【永年勤続教職員表彰】108名が表彰されました。

【記念講演】鳴門教育大学大学院教授 湯地宏樹先生「豊かな遊びが生み出されるための保育者の環境構成力について～環境を構成する要素をマネジメントするために私たちはどのように考えていったらよいのか～」

ひとりではできないが、少し後押しすればできるレベル(発達の最近接領域)について具体的な説明がされ参考となった。子どもができない環境を設定して放任することや、できるのにやってあげる過保護な保育では子どもの育ちはないこと。発達の最近接領域を見極め、気持ちや技術の後押しをしていくことが大切であることを学びました。

## 教育研究講座(8年目～)

〈7月25日(火)、グランシップ〉

【講義1】常葉大学教授 木宮敬信先生「今求められる安全管理について」

安全管理の上で大切なことは、働く人たちの心身の健康管理が基本であることが分かりました。自分自身の体調を把握することや職員同士がお互いに声を掛け合うことができる風通しの良い保育をしていきたいです。危機管理マニュアルについては、ルールの有無ではなくルールを守る仕組みが整っていること、人の目で安全確認をすることが、命を育む現場において基本的で最も重要だと再確認できました。

【講義2】東京立正短期大学准教授 鈴木健史先生「保育の質向上のためのチームづくり」

チームづくりで大切なことは、自分を開示すること、お互いの弱さを見せあうということを知りました。質の高いチームや保育は、深い信頼関係が土台にあり、ともに学ぶ関係であるということ。一日の保育の振り返りや職員間の対話を増やし、一人ひとりの力を発揮しながらチームで保育をする楽しさを、職場の先生方と味わっていきたいです。

## 特別支援教育研修会

〈7月26日(水)、グランシップ(サテライト方式により東部・西部でも開催)〉

【講義1】公益社団法人子どもの発達科学研究所副所長 大須賀優子先生「発達に課題のある子どもを育てる保護者へのアプローチ」

発達に課題のある子どもを育てていくには、子ども、保護者、課題に向き合っていくことが必要ですが、まずはなぜそうなってしまったのか家庭の背景や環境等、要因を考えていくことが重要だと学びました。

保護者は長い歳月をかけて子どもの成長を見守っています。保護者の思いを受け入れたり、ともに発達について考えたり、保護者理解をすることで信頼関係が築かれ、より様々な方向から子どもと保護者の支援ができると感じました。

「知る・寄り添う・支える」を大切にしていきたいと学んだ講義でした。

【講義2】岐阜女子大学准教授 佐々木恵理先生「理解と支援に役立つカウンセリング・マインド～教職員一人ひとりが力を発揮するために～」

時代とともに環境は大きく変化し、ひとり親家庭、共働



き家庭の増加傾向、スマートフォンの所有や個室の確保等が原因で家族と過ごす時間が減少しています。人間関係の希薄化が進む現代こそ、教師が子どもや保護者の支えにならなければならないと思いました。

ありのままの「自己一致」。良い悪いと評価をせず受け入れる「無条件の肯定的関心」。相手の感情を自分自身のもので感じ取る「共感的理解」。三点のポイントを教えて頂きました。

改めて保育を見直し、意識して関わっていきたくです。

## 乳幼児教育研修会

〈7月31日(月)、グランシップ〉

【講義1】お茶の水女子大学教授 宮里暁美先生「乳幼児の育ちを支える環境や援助の在り方」

講義を受け、情報過多なこの時代に自分自身で取捨選択をして生きていくためには、幼少期から主体性を育む必要があると知りました。

子ども達の声に耳を傾けて、自分で物事を判断する能力を身につけていけるような保育をしていきたいです。

【講義2】NPO法人子どもの森理事長 吉田隆子先生「子ども達の楽しい食卓と元気な心と身体」

講義の中で「食事=人育て」という言葉が印象に残っています。時間が決まっている中で焦ってしまうこともあり、なかなか一人ひとりに寄り添って食事を進められていないと反省しました。食事は友だちや保育者と会話をし楽しむだけでなく、よく噛んで健康に繋がる、箸を持ち指先の器用さが育つなど、様々なことに繋がることが分かり、丁寧な時間を過ごしていくべきだと改めて感じました。子ども達の将来に繋がるような食事の時間を毎日積み重ねていきたいと思っています。

## ミドルリーダー研修

〈7月31日(月)～8月2日(水)、グランシップ〉

【講義1】鈴木まり子ファシリテーター事務所代表 鈴木まり子先生「園内研修を推進するための～ファシリテーションを学ぶ～」

ファシリテーターが行う園内研修の意義と進め方、企画運営が楽しみになることという内容で学びました。ファシリテーターは、園内の研修(話し合い)の場においては、出席者一人ひとりが主役となるようにし、課題解決に向けて多様な意見を聞き合い新たな解決策が生まれ、自分事になる、またメンバーのやる気を促進する役割を担っています。話し合いの進め方の8つのコツを踏まえご講義いただきました。

【講義2】高知学園大学・高知学園短期大学教授 山下文一先生「カリキュラムマネジメントの意義とミドルリーダーの役割」

目先のことだけにとらわれず、将来子どもたちが生きる社会はどのような社会か?その社会を生き抜いていくためにどのような力が必要か?そのためにわたしたち保育者はどのような役割を果たしていくのか?についてのご講義でした。

時代を超えて受け継ぐものと、時代の変化とともに変えていく必要があるものを見極めていく「しなやかさ」と強靱な組織が必要であることを学びました。また、そのためには、子どもたちの将来に影響を与えるという自覚と責任をもつこと、そして、より質の高い教育・保育の実現につ

とめていかななくてはならないこと、その他カリキュラムマネジメントについて学びました。

## 第4回初任者研修

〈8月4日(金)、リモート研修〉

【講義1】常葉大学教授 長橋秀樹先生「子どもの絵の発達について」テーマ：幼児教育における描画活動の発達について 領域「表現」の意義や子どもの知的欲求の場の獲得について、環境を通して行う教育及び保育の意義・特質についてご講話いただきました。

また、子どもの描画活動について絵画領域におけるポイントや学校教育に接近する保育と小学校以降の学習指導要領との共通点から見える造形活動（遊び）もお話いただきました。

幼稚園は、倉橋惣三が思考する“遊び”を通しての保育の重要性を基本のスタンスとして、造形遊びを考えていきたいと思いました。

【講義2】岐阜聖徳学園大学 松本信吾先生「身近な自然を活かした保育」

「遊びとは」「自然の意味」「身近な自然とのかかわりを支える保育者の援助のポイント」、以上3点の視点からお話いただきました。保育者自らが環境に対して心を開くこと、「心動かされる」場に誘うこと、自由を保障し邪魔しないこと、子どもの表現を受け止めること、「遊び込む」ことに最大の価値を置くことをふまえ、自分の園でできる所から考え日々の保育に生かしていきたいと思いました。

## 主任教員研修会

〈8月7日(月)、グランシップ〉

【講義1】桜花学園大学副学長・名古屋短期大学教授 小川雄二先生「楽しく食べる食育」につながる知識と園での実践」

五感すべてを同時に使う「食」を通して、脳内のメカニズムや身体の関係性を踏まえて、園での食育の取り組み方を学び、家庭に広めることで、成長に大切な土台を共に育てていく大切さを学びました。

【講義2】岡山大学准教授 横松友義先生「自園の未来を創ろう～リーダーのためのカリキュラムマネジメント研修～」

幼稚園教育要領の実現と各園の特色あるカリキュラム創りを実践していくために、何から取り組むのか、方法と手順を学びました。とても細かく説明していただき、まず必要な現状把握を進めてみたいと感じました。今後園内研修にて自園のカリキュラムの見直しに役立てたいと思います。

## 3年目教員研修会

〈8月8日(火)、グランシップ〉

【講義1】武蔵野大学教授 箕輪潤子先生「子どもの園生活や遊びを支える保育者～ミドルとして振り返る～」

講義の中で先生は、ごっこ遊びをする子どもは身近な大人の言動や行動をよく見ており、その真似をして遊びを展開させていると話されました。子どもに良くも悪くも影響を及ぼす保育者として、子どもの見本になるような存在でありたいと強く感じました。また、子どもにも関心の高いカブトムシの成長過程を取り上げ、小さな命であっても生き物に対する畏敬の念を子どもに伝えたいと思いました。

【講義2】常葉大学教授 木山幹恵先生「子どもたちが安心して園生活を送るために～安全管理で大切なこと～」

1つの重大な事故の裏には29の軽微な事故があり、さらにその背後には300件の異常が存在するというインリッヒの法則をお話されました。小さな事故から大きな事故を未然に防ぐことが大切であり、そのためには記録をとることと職員全体の意識を高めていく必要があることを感じました。

## 教育研究講座（4～7年目）

〈8月8日(火)、リモート研修〉

【講義1】共立女子大学教授 田代幸代先生「保育記録の書

き方と生かし方

—自分の保育をブラッシュアップしよう！—

「保育記録の書き方と生かし方」では、記録の書き方には様々な様式があり、それぞれのメリットやデメリットのある中、年齢に合った書き方を見つけることが大事だと分かりました。保育記録を見直す方法も教わり、今後の保育にも活かしていきたいと思います。

【講義2】武庫川女子大学教授 倉石哲也先生「乳幼児期の教育・保育において『こどもを一人の人間として尊重する』とはどういうことか？」

今回の研修では、子どもの権利を尊重することの大切さを改めて感じました。できないことを認め、それを支えていく保育が子どもにとって大切であると学んだので、子どもの失敗やできなかったことを受け入れてかかわっていきこうと思いました。また、どのようなことが不適切保育にあたるのか、それを防ぐためにはどうすればいいのかということも学びました。保育者の認識や職場の環境などの見直しをして、不適切保育を防止していきたいと思いました。

## 初任者研修会（第5回）

〈8月9日(水)、グランシップ〉

【講義1】静岡福祉大学教授 二木秀幸先生「表現あそびを楽しもう」

表現とは、内面にあるイメージを技術を伴って表にあらわすことである。そして、その技術だけでなくその表現を受け止めるアンテナを磨いていくことが必要であることを学びました。日々歌や詩、写真など様々な方法でイメージをあらわし、視点を変えながら感じていくことの積み重ねが、保育者として子どもの表現に敏感に回答できることにつながると学びました。また、実際に表現遊びを楽しんでいく中で、表現には相手が応答しやすいように伝えるコミュニケーションも含まれることを学び、日々その子にあった表現の仕方を模索していく積み重ねが重要であると考えました。

【講義2】静岡県立短期大学部教授 藤田雅也先生「造形遊び」

80枚の画用紙を道具なしで高く積み上げる等、実際にグループごとに実践して「こんな方法もあったんだ」と気づき、試しては壊れ、また試すの繰り返しに夢中になりました。また、感じていることを言葉で伝えあう機会にもなりました。グループでのディスカッションの際には、ただ「すごいね」と抽象的に伝えるのではなく、「この色合いがいいね」「〇〇みたいだね」などと、一つひとつ感じたことを頭の中で考える良いきっかけになりました。造形の楽しさと共に、それらを誰かに伝えることの難しさと大切さを学ぶことができました。

## 2年目教員研修会

〈8月10日(木)、グランシップ〉

【講義1】美作大学教授 高久新吾先生「ピアノ奏法のポイント」

講義1では、主に譜読みと練習、伴奏法、暗譜のすすめ、緊張しない方法を教えていただきました。また講師の先生のきれいなピアノの生演奏を聞き、演奏することへの興味が高まり、これからの練習の活力となりました。今回学んだ注意点や練習ポイントを日頃の練習に活かしていきたいです。

【講義2】静岡大学教授 田宮縁先生「幼児教育は子ども理解からスタートする」

講義2では、幼児教育の基本を学び、環境を通して行う教育や遊びを通しての総合的な指導、一人ひとりの発達特性に応じた指導について学びました。そしてまず、子ども理解からスタートし、その後の省察（リフレクション）がとても大切だと学びました。計画的な環境構成にも触れ、子どもの経験の意味を理解することで、一人ひとりの主体的な活動を促す環境構成・援助が可能であるということも学びました。子ども一人ひとりの内面や発達特性に応じた指導や援助が行えるよう、引き続き保育に夢中になりたいです。

# 子どもと大人の育ちを手伝う仕事

～家族の意思決定フォームをコーチしながら応援する～

その3

## 香野 毅

1970年、佐賀県生まれ。静岡大学教育学部教授。博士（心理学）。専門は障害児心理学、臨床心理学。九州大学教育学部卒業。同大学院を経て、九州大学発達臨床心理センター主任、2000年より静岡大学教育学部講師、同准教授を経て現職。

大学の教育・研究に加え、幼保こども園の巡回相談、学校の相談や研究助言、研修講師を引き受ける。障害児者の療育訓練会、発達障害児の親の会、静岡特別支援教育勉強会などを催す。NPO法人しずおか福祉の街づくりの理事、心理臨床学会理事、日本リハビリテーション心理学会常任理事など。



昔から野球観戦が好きで、長年の〇△ファンです。経験者ではないので、技術的なことは分かりませんが、TVなんかで解説者が技術的なコメントをしますね。「ピッチングフォームが素晴らしい」とか「バッティングフォームで腰の使い方が云々」とかです。なるほどそんなもんかと素人ながらに知識だけは増えていきます。同時に、プロのコーチが指導しているのに、なんでもっと上手くならんのか!? とひいきチームの選手に思ったり、結果に一喜一憂したりします。ファンとはおせっかいと感情移入をデフォルトとしていますね。ところでこのフォームということば、「型や形、姿勢、やり方」と訳せます。今回は、家族の意思決定フォームについて就学を話題に論じてみます。

障害や発達の遅れのある幼児期の子どもの保護者との相談において、避けては通れないテーマとして、就学があります。小学校入学にあたり、どこで学ぶかを選択決定することになります。進路先としては、通常学級、特別支援学級、特別支援学校があり、これに私立学校も加わります。特別支援学級には、知的障害学級と自閉症・情緒障害学級があり（数は少ないですが、肢体不自由や病弱も）、特別支援学校には、知的障害、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、病弱があります。年長さんの1月までには次の4月からどこに通うのか決まっている必要があります。各市町の教育

委員会に就学に関する委員会が設置されており、子どもの進路先を、家族、受け入れ先学校、在籍園他と連携して振り分けていきます。細かな制度や進め方については、教育委員会のHPなどに案内がありますので参照してみてください。

さて、ある家族について見てみましょう。年少のときに園の先生から気になるところを指摘され、医療機関を受診、その後、園と児童発達支援施設（療育）の並行通園を始めました。母親は受診を機に、書籍やネットからも様々な情報を集め、子育ての参考にしています。父親は、おおらかに家族全体を見守っています。すでに小学校に通う姉ともまもなく3歳になる妹がいます。両親の実家はともに車で1時間ほどの距離で、週末などは頻繁に顔を合わせます。年中の3月、通っている療育のスタッフから「就学はどのように考えていますか？」と問いかげられ、この家族の‘就学ドラマ’が動き出しました。

母親は、ネット上で先輩家族の体験談、教育委員会のHPを調べはじめました。父親は、母親のそのような動きを感じつつも、「きっと大事なことは話してくれるだろう。最近、子どもたちもしっかりしてきたな～」と思いつつ、動きは控えます。両方の実家にはこれまで「ちょっと苦手があるから、療育に通っている」とは伝えていました。

年長になり、園の先生から「専門調査\*を受けてみては」と切り出されました（※教育委員会が行う就学に関する相談のひとつ）。主治医からは、「これまで発達検査は実施したことがあるけど、次は知能検査をやって知能指数（IQ）を算出してみましょう」と提案されました。療育先では先輩ママさんの体験談を聞く勉強会が開かれ、母親も参加しました。さらには小学校で学校公開日があると聞き、父親は仕事の調整ができず、母親だけが参加し、通常学級と支援学級を見学してきました。そうこうしているうちに専門調査の面談設定日が近づいています。そこでは家族の希望や意向を尋ねられることとなります。さてなんといいの？と母親は不安になってきました…。

就学に関する相談において、いくつか大事にしているポイントがあります。貫くスローガンは「どこに決めるか！も大事だけど、どう決めるか！がより大事」です。

#### ①登場人物を整理する

この家族だと、本人、父親、母親、姉、妹、祖父母が二組、園の先生、療育のスタッフ、主治医あたりでしょうか。「みんなが関わりながら決めていくんですよ」とお伝えしつつ、例えば「大事なことなので両親でしっかり話し合って、決めていくので、それを尊重してほしい」と両方の実家に伝えておくことを勧めます。たまに終盤に祖父母から思わぬ球が飛んでくることもあるので備えておきます。

#### ②リアルな情報を集める

就学のことについて「知らない」は当たり前です。特別支援学校や支援学級って、実際に見たことないですよ。知らないことに対してはイメージだけが膨らむことがあります。世代間のイメージ差も考慮しておいた方がよいでしょう。体験する、見に行く、話を聞く、調べる…できるだけ多くの手段を駆使してリアル情報を集めてもらいます。それでもできれば夫婦と一緒に、本人も連れて、を推奨します。

#### ③判断材料を整理する

結論が単純に決まるのならば、誰も悩みませんよね。メリット・デメリット、得るもの・そうでないもの、こっちかあっちか。判断材料は盛りだくさんです。しばしば話し合いながら、紙に書き出していくようにします。さらにはどれに重みをつけますか？と記しをつけます。目に見えるように、そして「自分たちは、こういうことを考えたんだ！」と記憶に残るように整理していきます。

#### ④情報を共有する・告げる

例えば、医療機関にあらためて夫婦で受診するよう促します。私との面談に夫婦で来るよう誘うことも。夫婦の意見が異なることはあってもよいでしょうが、意思決定のフィールドに二人がいないことには始まりません。祖父母に、お孫さんの詳細を告げることを提案します。祖父母に「話したくない」という気持ちもあるでしょうが、「話さなくはならないこと」もあります。意に反した反応や言葉が返ってくるかもしれません。そこも含んでやっていかねばなりません。

この家族の場合には、さらに伝えるべき相手があります。それはお姉ちゃんです。さらには妹さん。同じ学校に通う、あるいは通わないことになるきょうだいには、分かる言葉でしっかり伝えておく必要があります。これも家族にとって大きな仕事となります。チームに隠し事は不要です。もちろん本人にも必要なことを告げることもなるでしょう。

#### ⑤決定者は本人、家族は代弁者と理解する

学校に日々通って過ごすのは本人です。「ぼく、ここで勉強したいよ。毎日、通いたいよ」という本人の気持ちを、「代弁」するのがご両親だし、代弁するにもっともふさわしいのがご両親だと伝えます。父親がどこに行かせたいかは重要ですが、決定的ではないと理解してもらいます。子どもの意思決定をみんなで助け、代弁するのです。

「夫婦喧嘩は犬も食わない」とは、夫婦喧嘩はつまらないものだから、他人が仲裁したり心配したりするのは愚かであるという例えですが、私たちは食べます。むしろ欲しがります。しっかり揉めて、意見を交わして、背景にある思いを露わにするよう働きかけます。

「先生はどかが（我が子の進路先として）よいと思いますか？」と尋ねられることがあります。 「〇〇がよい」とは答えません。上のポイントを確認しながら、「家族がしっかり話し合って決めたところがよいと思います」と応じます。参加するのは家族というチーム、バッターボックスに立つのは子どもですから。そして毎シーズン、休みなく自分たちのチームで戦っていくのです。



# 可能性を引き出すリーダーシップ

～メンバーの個性が輝くチームへ～

4



## 松原 美里

(合同会社ウメハナチャイルドケアコミュニケーションズ、保育コミュニケーション協会 代表)

北海道網走市出身

保育士。横浜女子短期大学卒業後、横浜市の保育園、川崎市の児童養護施設に勤務。認定こども園保育園部施設長を経て、現在は静岡を拠点に全国で活動。

コーチング・心理学・NLP・システム思考等を学び、資格を取得。保護者向けの子育て支援講座、新人・中堅の保育士向けのコミュニケーション研修、管理者向けのマネジメント研修を提供し、「参加者が主役」「笑顔あふれるワーク」が好評を博す。「子どものために大人が輝く背中を見せる」をモットーに、オンラインサロン、園内ファシリテーター・認定講師の育成も行っている。

ここまで3回に渡り、チームを導いていくための捉え方・導く旗の立て方についてお話をしてきました。

一方で、それぞれは頑張っただけでも個々のままでは一人分の“一馬力”の集合体。“チーム”として掛け算する力は生まれません。今回は最終回ということで、個性が集う“職員集団”が“頼もしいチーム”へと成長していくためのアプローチについてご紹介いたします。

### どんなチームでありたいか

あなたが理想とするチームはどんな関係性でしょう？できれば子どもを真ん中に、それぞれのメンバーが持っている力を最大限に生かすことによって、自己有能感ややりがいを感じてさらに相乗効果が起こるようなワクワクするチームを。そんな個性豊かで魅力的な大人の背中に子どもたちは憧れを抱き、未来へと希望を持って成長していくことができるのではないのでしょうか。

### 相手をもっと知りたいと感じる気持ちから

一人ではなくチーム…と考えるときに、大切なのがメンバーです。これまではクラスの子が「うちの子」でした。リーダーになってからは、一人一人のメンバーを「うちの子」と捉え、丁寧に関係性の糸を紡いで行くことが大切です。そうする中でメンバー同士が愛着を持ち、支え合えるチームとしての土壌ができてくるのです。そのためには、まずお互いの人柄に目を向け、条件付けではなく無条件の存在

を受容承認し合える関係性の土壌を作ることが大切です。

一緒に仕事をしていても、必要最低限の情報共有だけでは、お互いの人柄が見えません。その言葉にどのような思いが込められているのかが分かれば、消えていく誤解もあるでしょう。そのためにもまずは、お互いを知り合うことから始めてみませんか？コミュニケーションに役立つ「木戸に立てかけし衣食住」という切り口がオススメです。身近な先輩・園長先生・少し距離を感じる同僚、日々の中で会話を重ねていきたい保護者と…こんな切り口から始めてみてはいかがでしょうか。

- 木 気候や季節の話
- 戸 道楽（趣味）の話
- に ニュースの話
- 立 旅の話
- て 天気の話
- か 家族の話
- け 健康の話
- し 仕事の話
- 衣 ファッションの話
- 食 食べ物の話
- 住 住まいの話

共通点に気がつく、心の距離が近づき相手へのイメージが変わることもあります。私たちは同じ言葉を使っている、意味づけることやイメージは育ってきた背景や環境により、人それぞれです。雑談を通してお互いの興味関心

や感じていることを知り合ううちに意外な姿が見えて関係性が変化することもあるでしょう。まずは、自分が感じていることをテーマにした他愛もない雑談から自己開示をはじめてみましょう。その様子を見て「この人はこういう人なんだ」と安心すると、相手からも「そうなんですね…。じつは私も…」と会話のきっかけが生まれてきます。

勤務中に関係ない話をするのは良くないのでは…と思われる方もいらっしゃるかもしれません。もちろん、主役は子どもです。一方で心の距離という観点から考えたときに、挨拶だけではなく雑談をする関係性を通してお互いを知り合うからこそ、安心して一歩踏み込んだ本音を話せたり、勇気の要る提案をすることができるのです。ミーティングの中でお互いを知り合うワークを取り入れるなど、メンバー同士もお互いを知り合う機会を意識的に作るようにしていきましょう。

### 問を共有することで、場が動き出す

子どもたちを支え感動を分かち合う毎日には、常に「これはどうなんだろう？」と感じることに対する判断と行動が伴います。その際、「うちの園の理念は〇〇ですね。それを踏まえて、子どもたちには〇〇になってほしいと願っています。」とチームのゴールを共有しましょう。そこへ向けて、「私たちは、どうしていきましょうか？」と問を共有してみませんか。

個人の価値観はさまざまあれど、園という大きな土壌の上に乗っている私たちはチームの一員です。「こうなっていきたい。そのために、どうしていこうか？」と考える場を作るのです。問い掛けられることによって、人は考え始めます。

「こうしてみるのはどうだろう？」「こう感じた」と様々な意見が出てきたときに、同じ方向を向いていくサポート役をするのが、リーダーの仕事です。否定や批判といった対立ではなく、みんなが同じ方向を向いていくことができる“*Yes, and*”のコミュニケーションを心掛けるのです。「〇〇、いいですね。〇〇さんはいかがですか？〇〇ですね。それ、大切ですよ。」一つ一つの意見を評価判断せずにチームのテーブルに載せ、多面的に融合していくことで見えてくる世界があるのではないのでしょうか。「みなさん、いろいろな意見を有り難うございます。私たちのゴールは〇〇ですね。そこへ向けて、まず何から始めていきましょうか？」と身近な一歩を見つけていきます。チームという軸に則ってみんなで考えることで、個性の分だけ幅が広がり、豊かな意見を紡ぎ合うチームとしての力を発揮していくことができるのです。

### 暗黙の了解を言語化する

何度も話をしていないのに伝わらない、会話が噛み合わない、相手が何を考えているのかさっぱり分からず、コミュニケーションに不安を感じることもあるでしょう。

もしかすると相手に問題があるのではなく、自分にとっての「当たり前」や「言わなくても分かるよね」と感じている“暗黙の了解”は、これまで子どもにかかわる仕事や経験を通じて身につけてきた、職人技。相手にとっては「何のことだろう？」と話が見えず、会話が噛み合っていない状態なのかもしれません。

相手は何に困っているのでしょうか？まずは、相手の目線が泳いだり、眉間にしわが寄ってきたテーマを振り返り、相手の目線に立って「見えていないこと」「必要としていること」をキャッチしていきましょう。〇〇が見えていないとしたら…、どのように前提の共有をしましょうか？「〇〇について、上手く伝わっていませんでした。気がつかなくてごめんなさい。〇〇というのは…」と、自分が当たり前だと感じていることの背景や意図・理由・意義などを言葉にしてみるのです。

意外と、自分が当たり前だと思っていることを言葉にするのは難しいもの。はじめは悩みますが、慣れてくるとこれまでを振り返り整理をするいい機会になります。

その上で、具体的なやり方や指示については、自分の当たり前だと捉えていることや工程を1. 2. 3. 4. 5. …とマニュアルにするように書き出して言語化してみることをオススメします。そして相手に伝えた最後に、「ここまで聞いてみて、どうでしたか？」と相手を感じていることに耳を傾けるのです。相手から、「〇〇は分かったのですが、〇〇のあたりでモヤモヤしています…」と返ってきたらそこからまた、足並みを揃えて行くことができます。

もどかしい思いもあるかと思いますが、万里の道も一歩から。

道のりは長く感じますが、一人ではありません。チームメンバーそれぞれの視点の違いによってもたらされる豊かな世界を子どもたちと共に楽しみながら、プロセスを愛おしむ中で、保育の日常が花開いていきます。頼もしい仲間と一緒に、唯一無二のチームを作っていきます。



## 「先生」とは

浜松学院大学附属愛野こども園 寺田 妃織

「先生」とは、明るくて話し上手で人前に立って表現できる人、というイメージだった学生時代。それに対して、私は人見知りでも人前に立つことも話すことも苦手で、できるだけ避けて過ごしてきました。こんな私でも先生になれるのかと不安になりながらも、保育の現場に足を踏み入れて約1年半がたちます。

初めは、分からないことや反省することばかりで不安になる日々が続きました。それでも自分なりに考え、まずはやってみようとする、分からないことは先輩に聞くことなど積極的に行動したり、先輩の保育を見て学び、視野を広げようとしていました。とにかく必死な毎日の中で、子どもの話をよく聞き気持ちを受け止めることや、自分自身が全力で遊ぶこと、表情やスキンシップを意識することなどにより、子どもたちにとって身近で話しやすい存在でありたいと思い、過ごしてきました。すると、子どもたちが笑うこと、名前を呼んで話し



かけてくれること、一緒に遊ぼうと誘ってくれることなどが増え、自信に繋がりました。また、泣かずに登園できるようになった子、友だちができて園生活を楽しめるようになった子など、たくさんの成長を見て、このような姿を見守ったり引き出したりする先生という仕事は、とても素晴

らしいと感じました。そして、目の前にいる大好きな子どもたちがよりよく過ごせる方法を考え、実践したり、子どもたちの何気ない言葉から学んだりすることで自分自身も成長できていると感じました。

私が今感じる先生とは、性格面だけでなく、子どもが好きで子どものためにと考える気持ちや、多くの経験から生まれる自信が必要であるということです。今はまだ自信がないですが、失敗もたくさん経験し、子どもが好きという気持ちを持ち続け、胸を張って「先生」と言えるように頑張ります。

## 子どもと共に

沼津梅花幼稚園 渡邊 美莉

小学生の頃から夢に見ていた幼稚園の先生になって半年ほど経った。疲れに負け、晩御飯を食べたらすぐ寝て、起きたら幼稚園に到着している。そんな毎日。4月当初に比べると仕事にも慣れてきたと思うが、体はまだまだ慣れていないようだ。ところが、疲れという壁を越えてくるように子どもと過ごす日々はとてもキラキラしていて、楽しくて、「私がやりたかった仕事はこれだ」と毎日のように感じるのである。

私が担当する年少さんは私と同じように右も左も分からず、不安な気持ちを抱えながら入園してきた。しかし、入園当初毎日のように大きな声で泣きながら登園していた子も今となってはお姉さん、お兄さんのように逞しい姿で登園し、楽しそうに1日を過ごしている。そのような子どもの成長を身近で見られることは私の元気の源にも繋がってくるのだ。毎日笑顔で元気に過ごすことができるのは子どものおかげなのだと思う。



その一方で、幼稚園教諭の楽しさ、面白さを得ていく過程には大変なことや悩むこともある。なぜなら保育には正解が無いからだ。子ども一人一人、言葉や態度、表情など表し方が違うため一人一人を理解し、その子に合った対応や声掛けをすることが大切だと思う。しかし、いざ実践

してみると上手くいかないことも多々あり、「保育って難しいな」と実感させられる。あの保育は合っていたのだろうかかと思いつつ、その日の出来事を家に持ち帰り反省する毎日。しかし、反省をし、それを次に活かしていくことが保育を改善するきっかけとなるのではないと思う。

不安なことが沢山あり、「先生」と呼ばれるほどまだまだ自分の保育には自信がない。むしろ、色々なことを教えてくれる子どもたちの方が「先生」であると思う。そんな子どもたちとこれからも一歩ずつ成長していきたい。そして、子どもが安心して、楽しく幼稚園生活を送れるように毎日精一杯励んでいきたい。

## 勤続30年を迎えて

静岡サレジオ幼稚園 佐野 佳代

幼稚園での30年間は、私の教員生活においてとても特別なものになっています。この素晴らしい経験を振り返ってみると、多くの感情と思い出が心に浮かびます。

就職1年目は、右も左も分からず、諸先輩方に支えられながら何とか過ごすことができましたが、この時に苦労したことが今となってはよい経験になったと思っています。それから月日を重ねていく中で、職場の仲間や子どもたちとの交流が私の教員生活に多くの学びや発見、喜びをもたらしてくれました。30年の間にたくさん子どもたちとその家族に出会い、共に成長させていただいたように思います。子どもたちの笑顔、好奇心、そして純粋な愛情は私にとって何よりも尊く大切なものでした。



また幼稚園教育の価値と重要性を深く感じ過ぎてきました。子どもたちに寄り添い、いつも共にいることを教育の基本として、子どもたちの無限の可能性を最大限に発揮できるように援助してきました。私自身の園では、誠実な人間と良

き社会人を育成するという理念を掲げながら、当園に関わるすべての職員がこの教育理念のもと、努力を惜しまず続けてきたことが、当園の現在の礎になっており、微力ながら私もその一員として一翼を担えたことを嬉しく思います。

30年の間に、幼稚園を取り巻く環境は大きく変化してきました。益々続く社会変容を鑑み、特にICT技術の発展については教育のアプローチの仕方を工夫していかなくてはならないと思っています。そして常に私たちは子どもたちにより良い教育環境を整え、成長し続けることが必要だと感じています。

最後に、私が出会った子どもたち、保護者、先生方、そして支えてくれたすべての人々に感謝しています。当園で過ごした年月は、私の生涯で最も貴重な時期の一つであり、これからも教育の世界で尽力し続けたいと思います。そして若い先生方にも幼稚園教諭の魅力を伝えていける存在でありたいと思います。

## 素敵なお縁

高洲南幼稚園 岩館 朋子

子どもの頃からの夢であった幼稚園教諭となり、気が付くとあっという間に年月が経っていました。振り返ってみると、本当に沢山の子どもたちや保護者の方、一緒に働いてきた先生方に助けていただいていたことを実感し、素敵なお縁に感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年度、初めて満三歳児の担任をさせていただきました。私自身未知の世界で、言葉掛け一つにも神経を使い「この援助で子どもを伸ばしてあげられているのか」「もっといい言葉掛けがあるのではないか」と園の先生方の言葉掛けに耳を傾ける毎日でした。そんな私の不安をよそに、子どもたちの何と自由で日々成長していること!!こんなに小さな体いっぱいに「自分でやってみよう」と頑張る姿「友達を思いやる優しさ」など、少しずつ見られる成長に沢山の喜びと感動を貰いました。また、満三歳児に限ったことではありませんが、子どもたちに助けられることも沢山あり初心に戻った一年でした。

今年度も満三歳児クラスを担当させていただいています



が、昨年とはまた違った個性を持った子どもたちに、新たな学年を受け持っているような気持ちで毎日を過ごしています。人数が少ないからこそ、一人一人に寄り添い個性を活かしながらやる気を引き出してあげられるよう心掛けています。

しかし、上手くいかない時も多くあり試行錯誤の毎日です。主任の先生をはじめ、いろいろな先生方に助けていただきながら日々過ごしていますが、初めての園生活を楽しく安心して過ごせるよう援助をしていきたいと思っています。そして、「幼稚園が好き」「友達が好き」「先生が好き」…と沢山の大好きの中で、愛情いっぱいの心豊かな子どもたちに成長してくれることを願っています。

多くの子どもたちの優しさや笑顔に触れ、沢山の成長を感じられる幼児教育の世界。この仕事に携われていることの喜びや素晴らしさと、出会えた方々に感謝しながらこれからも頑張ります。

## 幼稚園は第2の我が家

青葉幼稚園 PTA 会長

加藤 悦子

我が家には、小学校5年生の長女、3年生の次女、年長の長男がいます。

長女とともに、私も“母親として”青葉幼稚園に入園したのは8年前。幼稚園探して3歳になった娘と一緒に体験で訪れた時のことを今でも鮮明に覚えています。

人見知りで、なかなか私から離れようとしなかった娘に気づき、笑顔でやさしく娘の手を引きながらお友達の輪の中に連れ出してくれたことが、娘にとって私にとってもとても嬉しい出来事でした。先生にはいつも通りの保育の中での対応だったと思いますが、私たち親子には、それは「特別」でした。初めましてのお友達や先生と、楽しそうにしている娘の姿がとても印象的で、安心して我が子を託せる場所だなど一歩前進したきっかけとなりました。

長女が入園してからも、先生方には驚かされることばかりでした。子どもはもちろん、保護者の顔と名前

の把握に時間はかからず、今日、自分の子にどんなことがあったのかなど、担任の先生だけでなく全ての先生が情報を共有している組織力、運動会やお遊戯会などでご指導にすばらしい衣装。先生方の温かく細やかな取り組みに、ありがたいと思うばかりでした。

おかげさまで子ども達にはたくさんのお友達もでき、楽しい思い出がいっぱいです。長男を迎えに行く時は、必ずとっていいほど「幼稚園に行く！」と娘たち。今でも大好きな場所です。

幼稚園最後の年に会長職を担うことになり、初めは不安でいっぱいでしたが、寄り添ってくれる先生方や一緒に活動している仲間にも恵まれて、私にとっても居心地の良い場所になっています。残り少ない幼稚園生活になりますが、子どもたちに負けないうくらい全力で楽しみたいと思います。



## 子供と楽しむ、アートな休日のすすめ

さくら台幼稚園 PTA 会長

島口 直弥

私には、現在小学校1年生の娘と幼稚園年中児の息子がいます。2人とも、さくら台幼稚園の保育の理念(丈夫で頑張る子・仲良く遊べる子・自分で考える子)と先生方の温かい指導のもと、今日まで大きく成長することができ、日々感謝しているところです。

さて、私は現在美術館に学芸員として勤務しています。また、妻は小学校の教員で、美術の教員免許を所有していることもあり、休日によく子供たちを連れて美術館へ出かけます。「小さな子供には美術館は早いでしょう」「すぐに飽きてしまうのでは」…そんな心配の声が聞こえてきそうです。確かに、美術館と聞くと、作品や作家等、美術史に関する知識が必要で、黙って静かに鑑賞しなければならないという、どこか堅苦しく敷居が高いイメージが定着しているように思われます。

私は美術館に勤務する立場から、美術館での鑑賞に難しい知識は必要ないと考えています。例えば、絵画作品と対峙した際、「季節はいつだろう」「この人たちはどんなお話をしているかな」等、作品に応じた視点をもとに、作品の世界観やストーリー等を創造します。

その根拠を、作品の中の形や色、作品全体の雰囲気等に見出していくのです。また、展示作品の中から「家に持って帰りたい」と思う作品を選んだり、作品の中の人物のポーズを体全体を動かして真似したりと、鑑賞方法は無限です。むしろ形や色をツールに、作品と対話したりその世界に入り込んだりすることを楽しみ、自分なりの意味や価値を見出すクリエイティブな営みこそが、子供たちの鑑賞の意義といえます。

昨今の美術館は、対話型鑑賞や体験的なワークショップの開催、作品に触れたり作品で遊んだりできるコーナーの設置等、小さな子供が鑑賞活動を楽しむことができる工夫が多くなされています。静岡県は東西に広く、各地に個性的な美術館が点在しています。ぜひ地域の美術館に足を運び、子供たちとクリエイティブでアートな休日を過ごしてみたいはいかがでしょうか。



# 多様性を楽しくまなぶ、 海外園とのオンライン国際交流



## 前出 貴則

(株式会社シンクアロット 代表取締役)

NTTドコモ、大手コンサルティングファームを経て、シンクアロットを設立。  
日本の幼稚園と海外園をオンラインで交流し、世界観を広げるプログラム「EN-TRY(エントリー)」  
事業を拡大中。当事業は、2021年世界OMEP ESDアワード、ベビーテックアワード優秀賞。  
22年より東京都主催「多摩イノベーションエコシステム」でリーディングプロジェクトに抜擢。

私たちは、「こどもたちの世界観を広げる」を企業理念に、日本の幼稚園・保育園と、海外園とのオンラインによる国際交流「EN-TRY(エントリー)」というプログラムを提供している企業です。世界観を広げる、とは、いわば「多様性に対する関心を持つ」とも言いかえることができます。

昨今耳にしない日はない、世界の共通目標であるSDGsの観点でも、多様性理解はその根幹であり、また、ある調査では「こどもたちに身に付けてほしい能力」として、「世界の人たちと協働できること」が3位に入るなど、令和の保護者の方の価値観も変化しています。今後は、どこに暮らそうとも、より開かれた世界で、多様な人たちとお互いを理解・尊重しあうことが重要になることは間違いありません。

そんな未来で生きるこどもたちですが、異文化に対するバイアスは3~4歳から生まれるとされています。私たちの東京都との実証結果でも、年中児の時点で、より日本的な文化背景を含むキャラクターを好む傾向があることがわかっています。それ自体は決して悪いことではありませんが、世界に触れる機会がないままでは、「海外は怖い」「自分が知らないこと/人は怖い」という偏見・感情を抱き、こどもたちも、様々な関心を持つ機会を逃しかねません。

私たちのプログラムでは、いきなり交流するのではなく、約1~1.5か月をかけて世界を楽しく知ることから始め、相手の国を知り、相手のこどもたちを知り、そのうえでオンラインで同世代のこどもたちと交流します。これにより、こどもたちの関心を丁寧に育みながら、「世界は地続きである・多様な世界は面白い」ということを、伝えられる内容になっています。教材も工夫しており、海外園との連絡や交流はすべて私たちが通訳・サポートすることで、先生のご負担も極力排除しています。

また、22年には、東京都主催のもと、国際基督教大学 直井先生・大手保育園グループ様にて実証実験を行い、プログラム前後でのこどもたちの成長を測定しました。結果として、主体性・探求心・多様性におけるスコアが向上しています。

こどもたちが楽しいことを大前提に、こどもたちの多様性に向けたまなびの一つの選択肢として、世界交流はいかがでしょうか？私たちは全力でサポートいたします。



国際交流プログラム「EN-TRY」の詳細は、以下にてご確認・お問合せ下さい。  
ウェブ [www.tal-entry.com](http://www.tal-entry.com)  
メール [en-try\\_community@thinkalot.jp](mailto:en-try_community@thinkalot.jp)



恐竜になってわんぱくの森を冒険だ!



キャンディはいかがですか



ホクはちびっこ消防士



絵の具いっぱいまだぞ〜



ふたごのハロウィン弁当



おいしいスイートポテトをつくらせ



コスモス畑でハイチーズ



どんな話をしているのかな



大きなお芋を掘ったよ



美味しいお米になあれ

編集後記

今回で199号になる静私幼だよりは、いままで乳幼児の教育保育における著名な先生や各分野におけるご専門の先生方、また多くの教職員、保護者の関係各位の方々に執筆していただきました。私自身、広報委員になり、最新の情報と学びを得られたことは有益でした。少子化による会員数の減少は協会の改革を余儀なくされ、次回の200号を以て静私幼だよりは終了します。来

年度、静岡県私立幼稚園振興協会はスマート化を図る方針が打ち出されており、子育てに関する様々な情報提供をしていきます。

最後に広報委員として各園長先生方とも近くお話できたことに感謝し厚くお礼申し上げます。

静岡若葉幼稚園 若林 啓介